



天使の舞闘会

暁の天使たち 6

茅田砂胡

Sunako Kayata



立ち読み
専用



D 挿 口
T 画 絵
P

ハ 鈴
ン 木
ズ ・ 理
ミ 華
ケ

1

ヴァンツァー・ファロットは異様な気配を感じて顔を上げた。

辺りを見回してみたが、何もおかしいことはない。今はすっかり見慣れた光景が——それほど広くはない自分の部屋があるだけだ。

机と寝台の他にはほとんど私物らしきものがない、殺風景な部屋だった。

時間は深夜に近くなっている。

室内には彼の他に誰もいなかった。当然だ。夕食後すぐに部屋に戻り、ずっと『入室禁止』の合図を出していたのだから誰かが入ってくるはずはない。

罰則が設けられているせいか、ここの生徒たちはその辺の規則には至って従順だった。

事実、部屋の外にも人の気配はない。

気のせいだったかと思い、ヴァンツァーは再び、作成中の小論文に意識を戻した。

連邦大学の生徒は時間に余裕さえあれば学びたい科目を自分で選べる。

最低限の科目をこなせない生徒は進級できないし、最悪の場合は退校となるが、逆に能力さえあれば、何をどれだけ学んでもいいのである。

プライツィヒ校に途中入学したヴァンツァーは、必修科目に加えて法学、社会学、心理学、経済学、経営学など、特に難しいと言われる分野をいくつも選択していた。

いくら学問の自由が保証されていると言っても、これほど多くの科目を選ぶ生徒はほとんどいない。なぜならそれらの授業では毎日どつさりと課題を出される。全部をこなすのは物理的に無理なのだ。

食事中はもちろんのこと、睡眠時間を全部勉強に費やしても足りない計算になるが、ヴァンツァーは驚異的な手際を發揮して一人黙々と学んでいた。

退屈こそが彼の何よりの敵だったからだ。

幸い、この世界はヴァンツァーの知らない知識の宝庫だった。教える人間も生徒からの質問や討論に気軽に応じるし、知識を伝えることを惜しまない。

彼の故郷では『その道の權威』と言われる人々は程度の差こそあれ、自分が身につけた知識や極意をそう簡単に弟子に披露する（ひろう）ようなことはなかった。

ここは教えることが目的の学校という機関であり、教師と生徒は彼の考える師匠と弟子とは違うのかも知れないが、なかなか新鮮な経験だった。楽しくもあった。欲しいと思った知識がすぐに手に入る。

こんな経験は向こうの世界ではできないことだ。

そこでヴァンツァーは興味を覚えたものを端から選択して、貪欲（どんよく）に知識を吸収していたのである。

今も経済学で提出された課題を小論文にまとめて

いたところだった。

明日が提出期限なので再び作業に戻ろうとしたが、さつきまでのようには集中できない。

机の端の内線端末が点滅して通信が入ったことを知らせた。同じ寮内の部屋からの連絡だった。

ほとんど友人をつくろうとしないヴァンツァーに、こんな時間に連絡してくる相手は一人しかいない。

とは言うものの、その相手がわざわざ私室に連絡してくるのもこれが初めてだ。珍しいと思いながら通信に出てみると、小さな画面に映る相手の顔には珍しくも笑みがなかった。

くつきりと特徴的な眼に妙に真剣な光を宿して、端的に言った。

「今の、感じたか？」

「ああ」

短く答えたヴァンツァーだった。

おまえもか？ とは訊（き）かなかった。

彼も何かを感じたのは間違いない。しかもそれを

自分のところにわざわざ問い合わせてくるとなると、ただごとではない。

確かに何かが起きたのだ。が、その異変の正体に心当たりはなかった。少なくともこの世界ではだ。

あんなふうに急に身体の奥がざわりと騒ぐような、なぜかいても立つてもいられなくなるような感覚は、こちらでは感じるはずのないものだったからである。

内線の相手もそれを不思議がっているのだらう。

短く問いかけてきた。

「何だと思う？」

ヴァンツアーは素直に首を振った。

「わからん」

自分たちの世界にいた頃なら今のような『感じ』にも心当たりがあつた。肉体を持たない意志だけの存在に——聖霊に呼ばれた時だ。

しかし、この世界ではそれはあり得ない。慎重に言葉を選びながら言った。

「王妃たちと一緒に来た聖霊は仕立屋の故郷にいる。

俺たちに何か言おうにも届かないはずだ」

「その仕立屋がらみじゃないかと思つたんだがな。心当たりと言えればそれしかない」

「それなら直接、本人に訊いてみればいいだろう。あいつはサフノスク校生で、この時間なら寮にいるはずだ」

「いいや、いねえよ。先日から休学中とかで留守にしているんだ。少なくともこの星の上にはいない」

内線画面に映るレイシア・ファロットも難しい顔だった。

「だから多分間違いない。俺たちや何しろいつペン死んでる反則組だ。それをあいつがこの世に戻した。いうなれば、あいつが俺たちの生みの親ってわけだ。何らかのつながりがあってもおかしくない」

「ありがたくない話だ」

ヴァンツアーは言った。

実際ありがたくない話だったが、ヴァンツアーは今の暮らしを案外、気に入っていた。生き返らせて

もらつたからと言って恩に着るつもりはなかったが、頭から否定する気もなかった。

だが、自分が仕立屋と呼んでいるあの黒い天使が『人間』としてではなく本来の不死の一族として、肉体を持つ聖霊として活動を開始したというのなら、それこそお手上げである。

自分たちには何もできない。こちらからは相手の居場所もわからず、話しかける手段もない。

「いっそ、王妃に尋ねてみてはどうだ？」

ヴァンツアーの言葉にレティシアは顔をしかめた。

「それができりゃ苦勞はねえよ。あつちは中等部だ。とつくに消灯時間だぜ」

まだ十三歳の子どもという身分は何かと不自由なものである。

「せめてあのお嬢ちゃんに連絡できればいいんだが、おまえ、なんか伝つてはないか？」

しばしの沈黙の後、疑わしそくにヴァンツアーは言つた。

「なぜ、俺に訊く」

「殺された仲じゃん？」

「それはお互いさまだろう」

内線画面を通して二人はしばらく睨にらみあつた。

何とも不毛な睨み合いだが、先に根負けしたのはヴァンツアーのほうだった。それでなくても期限を控ひかえた小論文の作成に追われて頭が痛いのだ。

「……朝になったら連絡を入れてみよう」

「頼むわ。俺も王妃さんに当たつてみる」

同じ頃、シエラも眼を覚ましていた。

部屋に戻つてすぐ寝台に入つて眠つたはずなのに、なぜか急に意識が覚か醒せいした。

しかも、妙な胸騒こどうぎがする。左胸の下で、確かに鼓動が少し早くなっているのが感じられる。

（何だろう……？）

シエラは寝台に横になつたまま、気配を探つたが、灯りを落とした室内に異変はない。廊下にもだ。



寮の中はしんと静まり返っている。

まだ朝にはほど遠い。

それどころか、眠りについてからいくら経っていない時間だった。

シエラは慎重に上体を起こしてみた。

普段と変わらない平穩そのものの夜だというのに、なぜか落ちつかない。しかもその原因もわからない。わからないが、じっとしていられない気がした。

こうした虫の知らせとも言うべきものを、ただの気のせいで済ませることはシエラにはできなかった。

そう自分に言い聞かせて再び寝入ってしまうにはシエラはあまりにも自分の感応力を、危険や異変に對する勘の鋭さというものを知っていたのである。

生きるか死ぬかの瀬戸際(せとぎわ)に何度か経験していれば、鍛えられるのは身体や技ばかりではない。

精神の働きもいやでも磨かれ、鋭くなるものだ。

理屈では説明できない何か——第六感というべき常識を越えたその感覚にシエラは何度か命を救われ、

危機を脱してきた。その経験が教えている。

この胸騒ぎは普通ではないと。

隣の部屋にいるリイを訪ねてみようかと思ったが、生徒が夜間に部屋を出ることは禁止されている。

消灯後では内線も通じない。

悩みながらも、再び寝台に横になるしかなかった。朝になったら真つ先に隣の部屋を訪ねて、リイに相談してみようと思った。

リイならきつと気づいているはずだからだ。

しかし、シエラの予想に反して、その隣の部屋の住人は何も感じていなかった。

シエラばかりかレティシアとヴァンツァーまでが得体の知れない胸騒ぎに襲われたのだ。いつもならこの異変を感じ取れないようなリイではない。

むしろ真つ先に気づいて跳ね起きるはずなのに、リイは何も気づかず、ぐっすり眠っていたのである。ある意味、これこそが真の異常事態だった。

2

《ダイダロス・ワン》の異常に最初に気づいたのはイカロスV^{ファイヴ}だった。

けたたましい警報と共に警告を発した。

「機関室に異常発生！ 主動力炉がわたしの制御を離れました。ただちに点検および修正をお願いします」

これには人間たちも飛び上がった。

機関部の中心である動力炉は、宇宙空間に浮かぶ

《ダイダロス・ワン》のまさに心臓である。

施設内の動力のすべてをまかなっているばかりか、水や空気と言った人間の生存に最低限必要な要素も動力炉が運転しているからこそつくり出せる。

これが停止するようなことになったら、それこそ一大事だ。連絡を受けた機関室長は文字通り血相を変えた。部下を引き連れて機関室に駆けつけたが、主動力炉は停止しようとしていたのではなかった。その逆だった。

詳しく調べるまでもない。機関室長は主動力炉の状態を一目見ただけで蒼白^{そうはく}になった。

一緒に駆けつけた機関員も同様だった。

主動力炉は常に一定の動力を供給するように設定されている。多すぎず、少なすぎず、必要な分量の動力だけを生み出すようにだ。

その設定がなぜか外れてしまっている。

結果、急激な運転過剰に陥^{おちい}っている。

早い話が暴走だ。

「馬鹿な!？」

機関室長はすぐさま自分の持ち場に飛びついた。背中に冷や汗を感じながらも、考えられる限りの手段を片っ端から試して制御を取り戻そうとしたが、

主動力炉の運転過剰は一向に収まる心配がない。

部下の機関員も口々に泣き声を上げた。

「だめです！ 供給を抑えられません！」

「第二、第三、及び予備回路、すべて作動不能！」

「強制停止も利きません！」

動力炉自体を停止できない。供給を止めることもできない。せめて過剰に生み出される動力を外部に逃がそうとしたが、そんな小細工ではもうどうにもならないことは明らかだった。

主動力炉をずっと担当してきた機関室長は絶望のどん底に突き落とされながらも内線に飛びついた。

彼も専門家である。この事態が何を意味するか、その重要性は誰よりよく知っていた。こうなつては中の人間にできることは一つだけだ。中央官制室に連絡するや否や、悲鳴のような声を張り上げた。

「主動力炉が制御不能に陥りました。職員の避難をお願いします！」

「何だと？」

管制室長は耳を疑った。思わず問い返した。

「今、何と言った？」

「このままでは動力炉が爆発する恐れがあります！

ただちに全職員の避難を勧告してください！」

「何を言っている？ 状況を正確に報告しろ！」

管制室長も思わず声を荒らげた、その時だった。凄まじい振動が《ダイダロス・ワン》を襲った。

椅子に座っていた職員たちが危うく椅子から放り出されそうになったほどの力だった。

「わあっ！」

「な、なんだ!？」

ここは宇宙空間である。

小惑星帯という、安全とは言いがたい宙域だが、こんな振動をもたらすような要因はないはずなのに、まるで直下型地震のような揺れだった。

管制室の職員は全員、咄嗟に座席にしがみついて事なきを得たが、立って作業中だった部署の職員や通路を歩いていた人間はひとたまりもなく倒された。

何とか立ち上がった後も異様な振動が続いている。

「中央官制！ 今のは何だ！」

「何があったんだ！」

事態の説明を求めるそれらの声をすべて無視して、管制室長は態勢を立て直しながら部下に叫んだ。

「また戦艦の攻撃か!？」

「違います！ 外部には何も——ああっ！」

手元で忙しく操作をした担当者が振り返りざま、悲鳴を發した。

「探知機に異常発生！ 映像が出せません！」

「信号表示に切り替えろ！」

「だ、だめです！ できません！ 探知機は完全に沈黙しています！」

それは事実上《ダイダロス・ワン》が外部を見る『眼』を失ったということだった。

宇宙空間にあつてその状態が致命的であることは言うまでもない。

管制室長は齒ぎしりしながら叫んだ。

「D3に緊急連絡！ 探知情報の提供を要請！」

自分の眼が役に立たないなら、他の眼を借りればいいのである。《ダイダロス・シリーズ》同士には、そのための機能がちゃんと設けられている。

ところが、通信担当者までが悲鳴を發したのだ。

「室長！ D3が応答しません！」

「何だと!？」

管制室長がその先を叫ぶ前に通信担当者は素早く次の操作を試みて、再度の悲鳴を上げた。

「D5！ D7！ 9！ 11！ だめです、どこも応答ありません!!」

「ええい！ では、軍用監視衛星につなげ！ 何が起こっているのか突き止めるんだ！」

「そ、それが……」

「どうしたというんだ！ 故障か!？」

「違います！ 通信機能自体は正常ですが、交信が——外部との連絡が不能になっているんです!!」

管制室は今度こそ異様な緊張と沈黙に包まれた。

これで『耳』も失った《ダイダロス・ワン》は、完全に宇宙空間に孤立してしまつたのである。

気密扉の奥はすぐ格納庫になつていた。

格納されていた小型機は最新型で、ジャスミンはもちろん、ケリーも見えたことのないものだったが、二人はかまわずに乗り込んだ。

ただし、操縦席にはケリーが着いた。四十年前の形式しか知らないジャスミンに比べれば、まだしも自分のほうが適役であると判断してのことだった。

機体の動力を入れ、発進態勢をつくる。

しかし、その感応頭脳は発進を渋つたのである。

「外部宙域の状態が非常に不安定です。この状況が改善されない限り、発進は許められませんが」

という至極もつともな主張をしたが、副操縦席に座ったジャスミンが凄み^{すこ}を籠めて断言した。

「さつさと発進しろ。さもないとおまをを黙らせて勝手に飛び出すぞ」

「真面目に仕事をしている機械を脅すな」

言葉こそいつもの軽口だったが、ケリーの表情も硬かった。感応頭脳に言われなくても計器を見れば外部の異常は一目瞭然^{いもくりやうぜん}である。重力渦^{じゅうりよく}の真つ直^ま中に飛び出していくのと少しも変わらない。

どんな操縦者でも発進をためらう状況だったが、ケリーは躊躇^{ちゅうちよ}しなかつた。このままここに留まるほうが遥^{はる}かに危険だとわかつていたからだ。

「外は気にするな。おまへは生命維持に専念しろ。管制と航法は俺がやる」

ケリーには渋る感応頭脳を説得する稀有^{けう}な才能がある。迷いのない口調と、あくまで端的に事実を指摘してやるところが、頑固かつ慎重で知られる感応頭脳の胸を打つ(?)らしいのだが、この小型艇はそれでも発進をいやがつた。

「ですが、状況が……」

「探知機を総動員させてその状況をよく見てみる。この基地は崩壊の危機に瀕^{ひん}しているんだぞ。今すぐ

発進しなければ一巻の終わりだ」

有無を言わせない口調だった。

そしてそれは厳然たる事実でもあった。

乗員の生命を何より重んじる頑固な感應頭脳にも、今はこの無茶な要求に従うことが最善の策であると、ようやく呑み込めたらしい。

舵をケリーに渡して発進態勢に入った。

危険宙域を決して飛ばうとしない感應頭脳の慎重さにはジャスミンも何度も苦い思いをさせられていたから、この緊急事態にも拘わらず小さく呟いた。

「四十年経ってもこの有様か」

「軍用頭脳なら話は別だが、こいつは避難用だぜ」

安全第一なのは仕方がない。

しかし、決断した後の反応はさすがに迅速だった。

小型機はたちまち発進手順を完了させ、ケリーは宇宙空間に飛び出したが、その途端、激しい衝撃が小型機に襲いかかったのである。

予想していたことなので二人とも何とか耐えたが、

それでも座席から放り出されそうになった。

宇宙とは決して冷たく静まり返った場所ではない。

星が——銀河が生まれ、死んでいく、その膨大なエネルギーは人の想像を遥かに超えるものがある。

この広大な宇宙で人間の生存が許されているのは極めて限られた僅かな範囲でしかないのだ。

セントラル星系は共和宇宙連邦本部が設置されていることからわかるように、その宇宙でもっとも安定した場所の一つである。さらにこの小惑星帯は太陽や他の惑星からも充分に離れている。

充滿する小惑星にさえ気をつければ比較的安全な宙域のはずだった。

しかし、今のこの状態は尋常ではない。

二人の乗った小型機は嵐の海に投げ出された木の葉のようにきりきり舞をさせられた。

激しい大渦に引きずり込まれたかと思えば、突然、放り上げられる。さらにはいきなり横殴りのような衝撃を食らって跳ね飛ばされる。

感応頭脳が発進を拒否したのも無理はなかった。

しかも、この凄まじい嵐の影響を受けているのは小型機ばかりではない。周囲に浮かぶ小惑星も同じことなのだ。ひっきりなしに破片が飛んでくる。

破片といってもその大きさは数メートル、時には全長数十メートルにもなる岩の塊である。こんなものを食らったら小型艇などひとたまりもない。

操縦しているのがケリーでなかったら、たちまち大破していたに違いなかった。

そのケリーにしても、小惑星に激突しないように機体を維持するのがやつとという有様だ。

額に汗を滲ませながら叫んだ。

「ちよいとした……サーカスだな！」

「命がけのな」

ジャスミンも極めて厳しい顔だった。

しかし、彼女は夫の操作をじっと見つめていた。

この極限状態でも現在の機体の扱い方を少しでも学ぼうとしているのは明らかだった。

その時、警報が鳴り響き、ジャスミンは探知機に眼をやって叫んだのである。

「大物が来るぞ！」

破片の中でも特に大きな全長五キロメートルにも達する小惑星がすごい勢いで接近してくる。

「ちいっ！」

ケリーは咄嗟に艇を操作した。

さらに速度を上げてかろうじて衝突を回避したが、その時には別の小惑星が目の前だった。

操縦席のケリーはもちろん、ジャスミンの頭髮も残らず逆立った。

逆進は手遅れだ。方向転換も間に合わない。

互いに加速が着いているだけに避けきれない。

あわや正面衝突と思ったその時、目の小惑星が突如として粉々に砕け散った。

操縦桿を忙しく操作しながらケリーが叫ぶ。

「遅いぞ、ダイアン！」

「ひどいわ。これでもめいっばい急いできたのよ」

小惑星を砲撃した《パラス・アテナ》は小型機のすぐ傍を併走して襲いかかる破片から機体を守った。しかし、五万トン級の《パラス・アテナ》でも、この嵐の中で姿勢を維持するのは至難の業である。

通信機能にも障害が出ているのか、通信機に映るダイアナの顔は映像がひどく乱れている。

「二人とも、急いでそこから脱出して」

「こんなところで宇宙遊泳をさせる気かよ！」

懸命に機体を操りながらケリーが言えば、ダイアナも苦い口調で言い返してきた。

「仕方がないでしょう。クインビーを収容したからその機を収容する余裕がないのよ。あれを捨ててもいいのなら、そうするけど」

「それは困る」

ジャスミンが断言した。船内は依然として激しく揺れているが、その中で立ち上がろうとしている。

「現時点ではあれはわたしが操縦できる唯一の機体なんだぞ。そう簡単に捨てられてたまるか。すぐに

そっちに行く」

「……ますますもってサーカスだな」

ぼやきながらも、ケリーは小型機を巧みに操作し、《パラス・アテナ》に急接近して距離を保った。

もつと安定した宙域であれば牽引索が使えるが、こんな状況ではそれは無意味であり、却って危険だ。操縦者の技倆をもつて動きを合わせるしかない。

ジャスミンは後部の物入れからヘルメットを一つ取り出して操縦席のケリーのところまで運んできた。

たったそれだけのことをするのに、並外れた運動神経の持ち主であるジャスミンが何度もよろめいて倒れそうになった。小型機は相変わらず曲芸飛行のような動きを繰り返していたからだ。

ケリーにヘルメットを渡すと、今度は自分の分を取りに戻る。

「女王。その飛行服には今のヘルメットは合わない。この場で着替えるしかないぞ」

「知ってる。さっき聞いた。——できるだけ揺れを

抑えてくれるとありがたい」

「厳しい注文をしてくれるぜ」

外は難破なんぱしないのが不思議なくらいの大嵐だ。

大きな破片は《パラス・アテナ》が撃破しても、激しい噴流ジェットにもみくちゃにされるようなこの揺れと衝撃だけではどうにもならない。併走する《パラス・アテナ》との間隔を保つだけでも至難の業だったが、実のところ、ケリーはこういう無茶を言われるのはさらいではなかった。

一方のジャスミンも軍人として鍛えられた経験を最大限に生かして、こんな不自由な状況でも何とか身支度を整えたのである。

ケリーは今の宇宙服の使い方を簡単に説明すると、二人の身体を短い命綱でしっかり結んで言った。

「用意はいいか？」

それは身支度がどうこうと言うより、心の準備はいいかという意味だったが、彼の妻は不敵に笑った。

「いつでも」

《パラス・アテナ》が少し速度を落として小型機の後方に回った。いくらからでも破片と衝撃を遮さへぎる盾になるつもりだったのだ。それを見計らってケリーとジャスミンは嵐の海に飛び出したのである。

生身の身体に襲いかかった衝撃は凄まじかった。一瞬、視界さえ怪あやしくなった。

その視界の隅に操縦者を失った小型機がたちまち小惑星の破片に激突して爆発するのが映った。

《パラス・アテナ》が精一杯速度を落として二人に接近する。ダイアナにしてみればできるだけそつと受け止めようとしたのだが、二人の身体は勢いよく《パラス・アテナ》の巨体に叩きつけられた。

別々の方向にはじき飛ばされそうになり、咄嗟にケリーはジャスミンに手を伸ばした。

ジャスミンもケリーの手を握り返し、空いた手で船体のわずかな突起を掴んで身体を支えたのである。何とか自分の船の外装に取り付くことに成功したケリーは大声で叫んだ。

「この下に非常口がある！」

二人は手を繋いだまま、再度、宇宙に身を躍らせ、《パラス・アテナ》も心得て微妙に船体を捻った。

結果、二人はどうか非常口の近くに『落下』し、吹き飛ばされそうな噴流と小惑星の破片の嵐の中を這うようにして非常口を目指した。

この非常識な夫婦でなかったら間違いなく宇宙の藻屑もくずになっていただろうが、まずケリーが非常口に辿りつき、これ以上、互いの動きを制限することは危険だと判断して命綱を切り離れた。最初にケリー、そしてジャスミンが非常口を潜り、二人はやつとのことですべて空調の利いた船内に転がり込んだのである。

その時には二人とも顔中にびっしりと汗を掻き、大きく息を切らしていた。

「さすがに……きつかったな」

「よく言うもんだ。死ななかつたのが不思議だぜ」
《パラス・アテナ》に乗り込んでも、まだ安全とは言えない状況だが、ケリーにとっては慣れた場所だ。

大急ぎで操縦席に走った。

ジャスミンも後に続く。

ダイアナにとっても念願の操縦者の帰還である。

本来なら大喜びで声を掛けてくるはずだったが、操縦室に駆け込んだケリーを迎えたダイアナの顔は予想以上に硬かった。

「ケリー！ いったい何事なの？」

「それこそこっちが訊きたいことだぞ！ いったいこの宙域で何が起きてるんだ!!」

「わからないのよ。いえ——違うわ。この言い方は正しくないわね。何が起きているかはわかりきっている。ただし、その原因のほうはさっぱりなのよ。物理的に決してあり得ない現象が起きているとしか言いようがないわ」

「具体的には？」

「この宙域は安定していて重力異常が起きるような要因は何も見あたらない。だけど——今のわたしにどれだけの負荷が掛かっているかわかる？ まるで

巨大質量惑星のすぐ近くを飛んでいるような反応よ。それも一つじゃない。この狭い宙域にゴルゴン級の惑星や恒星が——それも複数、存在しているとでも考えなければ説明がつかない。あるいは超小型の活動銀河と言えいいのかしらね。そんなものが存在すればの話だけど、そのくらい巨大なエネルギーをわたしは感知しているの。ならば当然その発生源がどこかに存在しなければならぬのに、探知機にはまったく何も反応がないのよ」

絶望的な表情で手を広げてみせたダイアナだった。「あなたと一緒に幽霊星を見に行った時と同じだわ。あの時わたしには、あなたが見ているという惑星は見えなかった。重力場も感じる couldn't do that. 今は違う。少なくとも探知機が残らず振り切られるほどの異変が起きていることは理解できる。だからなおさら変なのよ。存在するはずのないエネルギー、出現するはずのない噴流に重力異常、そして磁気嵐——まさにお手上げよ。一つだけはっきりしている

ことがあるとしたら、死にたくなければ今すぐこの宙域から離れるのが賢明だってことくらいよ」

ありがたくない助言を受けたケリーは険しい顔で断言した。

「ダイアン。その原因については考えるな。考えたところで多分、無駄だ。これはあの天使が暴走してやっтерることだからな」

「わかつてるわ、ケリー。だけどそう簡単には割り切れないのよ。わたしは機械なの。それも、なまじ思考能力を持つていただけに、自分の理解できない超常現象には非常に弱い機械なのよ。わたしはもちろんあの天使さんが人間じゃないことを知っている。超常能力を持つていることも知っている。それでも正直なところを言えば頭がおかしくなりそうよ」とは言うものの、冷静に分析できている分だけ、ダイアナはまだ正常に機能していると言えるだろう。そして、その彼女が懸念しているのは自分と同じ思考する機械たちのことだった。

「わたしでさえこの有様ですもの。他の人工頭脳は言わずもがなだわ。イカロスVがいつまで正気でいられるかは保証できないわよ。他にもこの宙域に接近するありとあらゆる人工知能が影響を受けると思つて間違いないわ」

「ありがたくない話だ……」

「海賊」

副操縦席に収まつたジャスミンがひどく強ばつた顔で話しかけてきた。

「おまえ、まさか、この異常現象を全部あの天使がやつているというのか？」

ケリーは唸るうなように答えた。

「今は違う。——天使じゃない」

ケリーはそれをよく知つていた。

あの天使にはもう一つの顔がある。

あの天使は——少なくとも普段はとても穏やかで優しい性格をしている。

何をされても怒らないし、どんなことをされても

笑つて許してしまふが、そのいつもの顔の他に心の奥底に注意深くしまひ込んだ秘めた顔がある。

心理学で言う人格交代や精神疾患の類たぐひではない。裏表があるわけでもない。

ただ、厳然たる事実として『それ』はそこに存在しており、本人も自分のその部分を自覚している。

それを強靱きやうじんな意思の力で制御し、普段は決して表に出さないだけだ。

その枷かせがどういふわけか外れてしまつてゐる。

（何があつた？）

激しい焦りあせを感じながら、ケリーは問いかけた。
（いったい何があつた、天使ルウ!!）

返事はない。当たり前だ。応えてくるようなら、あれは最初からこんなことはしない。決してしない。「あんたにもわかつてるはずだ。あいつはあんたの身体を治し、俺の身体を再生してこの世に戻した。そのくらのことはあいつには何でもない。ただし、幽霊星おきての掟に照らし合わせれば立派な犯罪だがな」

「これはどうなんだ？ 犯罪じゃないのか?」

残らず異常数値に達している探知機を示しながら
ジャスミンは叫んだ。

「人間社会には原則的に非介入、それがラー一族の鉄則のはずだぞ。それなのに、これではめいっばい介入していることになる!」

「そうだろうな!」

船を操作しながらケリーも叫び返した。

先程の小型機より安定しているが、五万トン級の《パラス・アテナ》といえども、この大嵐の中では木の葉同然だ。おまけに感応頭脳ダイアナの誘導はほとんど当てにできない。命がけの綱渡りであることは百も承知で、操縦者の判断で航路を読むしかない。

磁気嵐の中心には《ダイダロス・ワン》がある。

そこから少しでも遠ざかろうとしながらケリーは意を決して言った。

「ダイアン。ティラ・ボーンに緊急連絡だ。大至急、アイクライン校非常勤講師のダン・マクスウェルを

呼び出せ!」

ダイアナは一瞬、絶句した。

自分で言ったように、彼女は正確無比を常とする機械だ。人間と違って判断を迷ったりはしない。

その彼女が返す言葉を失ったように見えた。

「ケリー。理由を訊かせてちょうだい。この状況でいったい彼に何ができるというの?」

「何もできんさ。ただ、あいつは金色狼の居場所を知ってる」

「誰ですって?」

「まだ見ぬ黄金と翠緑玉エメラルドの君」だ。——孫ちびの同級生だよ」

その文言もんごんにはジャスミンも驚いたが、ダイアナはさらに眼を見張って身を乗り出し、忙しく尋ねた。

「あなた、その人に会ったの?」

「ああ。髪は黒くしてたけどな」

「だったら本人を呼び出せばいいじゃない。たとえば学校の寮でも、わたしなら問題なく潜入できるわ」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。